

松下国際財団 研究助成 研究報告

【氏名】岩本佳子

【所属】(助成決定時)京都大学大学院文学研究科歴史文化学専攻西南アジア史学専修

【研究題目】前近代オスマン朝における遊牧民の定住化と支配者側の遊牧民認識の解明
-アナトリア中部地域、租税台帳からの視点-

【研究の目的】

アナトリアにおける遊牧民の定住化を巡っては、トルコ共和国を中心に多くの研究が行われ一定の研究成果が提示されている。しかしながら、これらの先行研究においては、前近代における遊牧民の定住化が自明のものとして扱われており、史料中に現れる定住化の実態と、定住化を引き起こした要因は依然として明らかとされていない。

したがって、本研究では 1) 先行研究に見られる事例抽出偏重ではなく、文書史料に記載されている税収や税目の変化に見られるような、数量的な変化に着目し、遊牧から農耕への遊牧民の生業の変化の過程を明らかにする。2) 文書史料を基に、文書史料の作成者である支配者側による遊牧民の認識の変化に着目する、という二つの観点を軸に、遊牧民の定住化とについて地域を支配する支配者側が、在地の住民をどのように認識し、支配を行ったのかという問題について考察を加える。そこから、アナトリアにおける遊牧民の定住化の進展を、遊牧民認識との連関の上で明らかとする。

【研究の内容・方法】

申請者は京都大学大学院に提出した修士論文の中で、アナトリア中部のボゾク・サンジャク(Bozok sancağı)と呼ばれる地域において、15から16世紀を通じて、オスマン朝中央から派遣された地域の支配者が、アナトリアの遊牧民を徐々に農耕民として扱うように変化するなど、税制上、地域に居住する集団の認識・把握単位が変化し、その事実が遊牧民の定住化と関連していることを明らかとした。

先行研究においては、年代記などの史料上の遊牧民の定住化を実際の生業の変化と見なす傾向があったが、定住化という遊牧民の遊牧中心から農耕中心への生業の変化のプロセスは、行政側の特定集団に対する認識の変化という枠組みの中で捉える必要があり、定住化の記述を即、実際の定住化と結びつけることはできない。したがって、同時代の遊牧民の中で、定住化した集団と定住化しなかった集団を比較し、それらの認識の相違が生じた背景を検証する必要がある。

そこで、本研究では遊牧民の集団名、構成員名、さらには遊牧民が支払う税の種類と、税目ごとの税額が記載されている、租税台帳(Tapu tahrir defteri)と呼ばれる史料に着目し、イスタンブールの総理府古文書局(Türkiye Cumhuriyeti Basbakanlık Osmanlı Arşivi)に収蔵される租税台帳や近年トルコ共和国で出版された租税台帳を用いた地域史の研究書を中心に、15・16世紀のアナトリア中部地域を対象に遊牧民の定住化を扱った各種史料の収集を行う。

次に、収集した各種史料、特に上記の租税台帳の解読を行い、数値の脱漏・誤植を修正した上でデータを整理し、一覧表を作成する。その後、徴収される各種税をその性質から遊牧民から徴収された税を大きく「農耕に関する税」と「牧畜に関する税」の2種類に大別し、両者の税額さらには税目の変遷をつぶさに解析を行う。また、行政側の遊牧民認識を明らかにするために、租税台帳における遊牧民集団の記載形式の変化にも注意を払い、史料の精読および分析に努める。

【結論・考察】

イスタンブール総理府古文書局収蔵の租税台帳を調査、検討した結果、遊牧民を扱った租税台帳は、当該地域の遊牧民が支払う「牧畜に関する税」のみを記載したものと、村や耕作地の名と「農耕に関する税」をともに記載したものの2種類に大別され、多くの地域で前者のタイプから後者のタイプへ変化していること、この変化と各種税額、記載様式の変遷に一定の連関が見られることが明らかとなった。また、この記載様式の変化と課税額の変化が「遊牧民の定住化」として理解されてきたことを再確認した。

次に、アナトリア南東部のアダナ県を対象に、上記の手法を用いて租税台帳を解析した。結果、先行研究では「16世紀のアダナ県では遊牧民が定住化せずに遊牧生活を続ける一方、冬営地で農耕が行われていた」とされてきたが、アダナ県においては遊牧民の牧畜の規模は小さく、冬営地での耕作が重要性を有していたこと、アダナ県では農耕に遊牧民として扱われなくなった元遊牧民が従事していた可能性が高いことを明らかにした。

今後は、上記の研究成果に基づき、アナトリア地域の租税台帳の比較研究を行い、認識の相違の要因を探る作業を進めていく所存である。